

実名とともに故郷に還った「北條民雄」

——没後七十七年目のいのちの帰郷に寄り添って

二三歳で天逝し、筆名を伏せたまま埋葬されたハンセン病作家、北條民雄……。生誕一〇〇年を機に、秘められた実名が明かされ、故郷の町で文学賞が設定されるに至った経緯を、本誌連載の北條の評伝『火花』で大宅壮一ノンフィクション賞を受賞した作家が綴る。

作家
高山文彦

ささやかな文学賞

そもそも一回限りの文学賞なんて、あつてはならない話なのである。受賞作が決まりセレモニーが終われば、二回目からはもうないのだから、どんなに趣旨が立派であろうと忘れられてしまう。

加えて、これから話そうとしているこの文学賞は、多くの大手の文学賞が既成作家の作品を選考対象とするのとは違って、「ハンセン病」や「人権」をテーマに四〇〇字詰め原稿用紙五〇枚を上限に公募された。この程度の枚数では、とても本にする分量には足りない。

説家の親族縁者から了承を得たうえでの実名公表という、私などからみれば近代ハンセン病史に画期を為す大きな出来事とセットになっていたのである。

「北條民雄文学賞」というのが、その賞の名前である。周知のとおり北條民雄は、昭和初期に社会と隔絶されたハンセン病療養所内から小説「いのちの初夜」をはじめとする作品群を書いて文壇を震撼させ、単行本は当時としては破格の二万部以上を一年間で売り、その後も売れつづけた。川端康成、小林秀雄らが同人をつとめる雑誌「文學界」で文學界賞を受賞、芥川賞にもノミネートされた。親から籍を抜かれ、三メートルほどの高さもある柵の垣根に取り囲まれた絶対隔離の療養所に隠れ住むハンセン病患者が、交通の自由なわぬ一般社会に向けてはじめて自分の小説を問い、そしてはじめて同情ではなく芸術性の高さによって一級の文学者たちに認められたのだ。

徳島県阿南市が北條民雄の故郷で、同文学賞を主催したのは阿南市であった。自治体主催する文学賞は全国にいくらかもあるが、阿南市が企てたのは、テーマに「人権」を据えたことでも明らかであろう。同テーマにたいして市は「北條民雄」もしくは「ハンセン病」をキーワードとする「ことに限定している。こ

い。主催者は、大賞その他の優秀作や選評を集めて冊子五〇部を刷り、地元の学校や図書館に寄贈する方法をとったのだが、やはり全国の人の目にふれる機会は圧倒的に少ない。

でも、と私は思う。どんなに華やかな光景から離れていようと、やはり野に置けレンゲソウ、こうした実験的で、ささやかな賞があってもいいのではないか。自分が選考委員をしたから言うのではない。もし関わりがなかったとしても、私はこの試みに心から拍手を贈りたい。一地方の自治体主催したこの文学賞は、じつに志高く、じつに長い時間をかけて成立したプロジェクトであった。それはハンセン病患者であった小

実名公表への長い取り組み

こから読みとれる意図は、この文学賞をきっかけにして、北條民雄の名前と作品をこれからも末永く人びとに記憶し読んでもらいたい、ということであろう。こだわりの強くて、文学賞としてはかなり偏っている。

岩浅嘉仁市長は徳島県議から衆議院議員になり、阿南市長に転じて四期目になる。県議時代から私は知り合いで、本誌に連載した北條の評伝「火花」（連載時の原題は「霖雨」）の取材・執筆の端緒をひらいてくれたのがこの人であった。彼は北條の遠戚にあたり、いまから二〇年以上まえ永田町の議員会館を訪ねた私に、ぼろりと北條の実名をこぼした。生まれ育った家は、いま変わらずにあるという。どのあたりにあるのかも、ほんやりとではあるが教えてくれた。

以後、岩浅氏とは本ができるまで連絡を絶った。調査活動で迷惑をかけたらいけないと思っただのだ。

北條文学賞が創設され、文字通り火花のごとく消えてしまったいま、当時といまを考えあわせると隔世の感がある。ハンセン病者について書くことはメディアでは慎重に遠ざけられていたし、当然出生地や実名を

「北條民雄文学賞」の受賞式は今年1月28日に行なわれた。